

【 10 】

氏 名	太 田 祐 周 おお た ゆう しゅう
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	教 博 第 2 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 40 年 9 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	教 育 学 研 究 科 教 育 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	ルソオに於ける人間の誕生
論 文 調 査 委 員	(主 査) 教 授 下 程 勇 吉 教 授 篠 原 陽 二 教 授 前 田 博

論 文 内 容 の 要 旨

ルソオの思想の解釈には、二つの対立する立場がある。一は「エミール」等に見られる自然説をルソオの思想の核心と見て、社会契約説をむしろその夾雑物と解する立場で、多くの浪漫主義者のとるところである。他は、社会契約説を重視し、自然説は既成の不平等社会を否定して平等の契約社会に道を開く媒介にすぎないと見る立場である。かく対立する解釈は、本論文の筆者によれば、もともと感情と理性、愛情と友情、感覚主義と精神主義、個人主義と共和主義、自然と契約等々の「両極の矛盾対立に住する」ルソオの立場そのものから生まれたものである。

生地ジュネーブの美しい自然に包まれ、たえず愛情を求めて育ったルソオは、巴里のサロン文化に反撥し、既成学問・思想・教育を否定し、人間本来の生命・感情に即して、自然にかえり、そこにおいて「何よりも先ず第一に人間である」権利を勝ちとろうとしたのであった。ここに、ルソオは人間本来の生命・感情において「自然」を誕生せしめたのである。かかる立場において、子どもを自然そのものに即して育成する教育を説いた「エミール」は「子どものための人権宣言」にほかならない。

自然にかえり「自己の本質に従って生きる」人間は、「自己との一致」に生きる個人であるが、かかる人間は本来的には自由にして平等な共和主義的市民である。もともとジュネーブの共和主義的理念に洗礼されて育ったルソオにとっては、現実の社会がいたるところ不平等の悪徳によって汚染されていることほど、たえがたいことはなかったのである。ここに「自由平等の共和主義的社会は如何にして誕生するのであるか」と問われるゆえんがある。かかる社会が誕生するのは、万人をひとしく包む一般意志に各人が自己の自由を自発的に譲渡することにより、各人が従前に劣らぬ自由を平等に勝ち得る社会契約の場においてである。社会契約説は本質的には社会誕生論である。かくしてルソオは、生命・感情において「自然」を誕生せしめ、精神・契約において「社会」を誕生せしめたのであった。

たえず愛情を求めてやまぬ情緒の性格であったルソオは、また同時に自己確立の徳に生きんとした精神であったが、とかく感情に流されるままに、彼はしばしば自己確立をめざす精神の道において挫折したの

であった。かかる事態を反映するかのごとく、ルソーにおいては、感情と精神、さらには自然と社会との二元的な両極は相反しつつも結合し、その危い平衡において、相互に本来の在り方から疎外する危険にさらされている。それとともに、またかかる危機において、両者は、相互に相反しつつ結合することによって、その源泉にかえり、それ本来の純粹性を新しくし、相互に「誕生」せしめ合うのである。すなわち、感性・自然の否定は精神・社会の誕生であり、またその逆である。かかる自然と社会との相互否定的誕生において、人間は人間である限りの自由と平等を創造的に享け得るのである。実にルソーの思想全体は、「自然と契約という両理念」を両極として、「人間を人間として誕生せしめる人間権利の宣言」であったと筆者は結論する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ルソーの主要著作ならびに関係文献を精読し、ルソーの思想の成立の由来をその社会的歴史的背景・彼の生活・遍歴・性格等との関連において究明しようとするものである。本論文の筆者は、ルソーを終始貫いている二律背反、すなわち肉体と精神、感情と理性、個人主義と共和主義、自由と平等、自然と契約等の対立の問題に注目し、なかならず、自己充足的な本来の人間であるために帰入すべき母胎としての自然と人々が自由平等の人格となる場としての社会契約との関係をルソー研究における根本問題としてとらえ、その探究に力をそそぎ、その間に、道徳否定の道徳、思想否定の思想、宗教否定の宗教、教育否定の教育、社会否定の社会といわれるごとき逆説性において、ルソーの近代的人間が誕生したゆえんを明かにし、ルソーの思想全体が、人間を人間として誕生せしめる人間の権利宣言であると結論するのである。本論文は、時として用語妥当を欠き、行論また必ずしも明快でない点があるが、筆者はルソーの思想の発展をその生活との緊密な連関において追求し、その間にルソー研究の根本問題を精力的に探求し、ことに「エミール」の全体構造の把握において特色ある見解を展開している。

本論文は、教育学博士の学位論文としてじゅうぶん価値あるものと認められる。